



AGC 株式会社

IR DAY 2024 <DAY 2> ライフサイエンス

2024 年 6 月 4 日

イベント概要

[企業名]	AGC 株式会社
[企業 ID]	5201
[イベント言語]	JPN
[イベント種類]	アナリスト説明会
[イベント名]	IR DAY 2024 <DAY 2>
[日程]	2024 年 6 月 4 日
[開催場所]	インターネット配信
[登壇者]	2 名 常務執行役員 ライフサイエンスカンパニー プレジデント 村野 忠之 (以下、村野) 広報・IR 部長 小川 知香子 (以下、小川)

登壇

小川：定刻となりましたので、ライフサイエンス事業の事業戦略に関して、ライフサイエンスカンパニープレジデントの村野より説明させていただきます。村野さん、よろしくお願いいたします。

目次



1. ライフサイエンス事業の概要	—————	P.3
2. 足元の状況と今後の見通し	—————	P.7
3. 事業戦略と業績目標	—————	P.9
4. 付属資料	—————	P.16

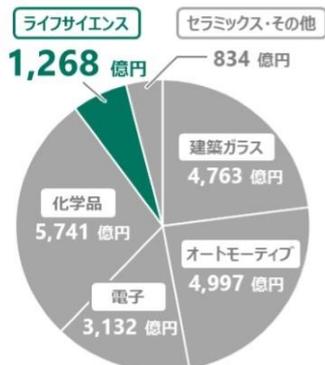
村野：ライフサイエンスカンパニーの村野です。本日はよろしくお願いいたします。

それでは、私からライフサイエンス事業につきまして、簡単に概要についてご報告申し上げます。

ライフサイエンス事業の概要

2023年 売上高 (億円)

AGCグループ 2兆193億円



ライフサイエンス事業の主な事業内容

事業分野		サービス概要
合成医農薬 CDMO	合成医薬品 CDMO	■ 合成医薬品の開発製造受託
	農薬 CDMO	■ 農薬の開発製造受託
バイオ医薬品 CDMO		■ バイオ医薬品（微生物、動物細胞、遺伝子・細胞治療、pDNA、mRNA、エクソソーム）の開発製造受託

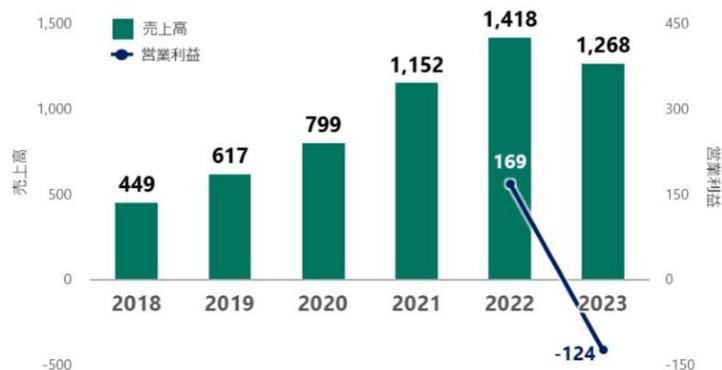
AGC グループのライフサイエンス事業ですが、こちらにあるとおりになります。

左に売上高がございます。右にライフサイエンス事業の主な事業内容で、大きく二つ。一つが合成医農薬、低分子と言われる医農薬の CDMO 事業、それからもう一つがバイオ医薬品の CDMO になります。サービス内容につきましては、そちらに記載されているとおりでございます。

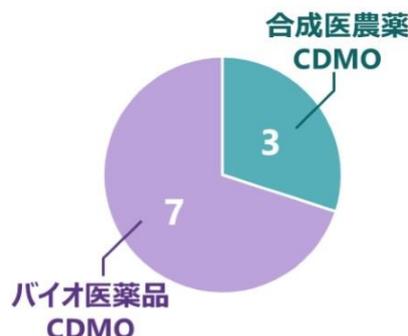
ライフサイエンスセグメント 業績推移

- 2023年は米国新規ラインの立ち上げ遅延や市場環境の悪化により減収減益も、積極投資により、事業規模は順調に拡大。

売上高・営業利益推移 (億円)



2023年度 売上高構成比



*2021年以前は化学品セグメント内のサブセグメント情報開示 (売上高のみ)、2022年以降は独立セグメントベース (2022年は参考値)

©AGC Inc. 5

次のページをお願いします。ライフサイエンスカンパニーセグメントの業績推移でございます。

2018年からのグラフで見ますと、2022年までは年率30%強の成長を実現してまいりました。ところが、2023年を見ていただきますとブレーキがかかっているのが実情でございます。

その内容はここに記載のとおりでございますが、主にバイオ医薬品 CDMO 市場環境の悪化、同じくバイオの CDMO の米国新規ラインの立ち上げの遅延によるものと、もう一つが既に準備をしていた大型の積極投資費用もあるということで売上、それから業績ともに2023年は一時的に悪化している状況でございます。

ライフサイエンスカンパニーの売上構成ですが、右のグラフのとおり7割がバイオ医薬品の CDMO、3割が低分子合成農薬の CDMO になります。

■ 1973年に研究所内に「ライフサイエンスチーム」を発足、1980年に事業化

1973年 当社フッ素化技術の、医農薬への応用可能性検討を目的とした「ライフサイエンスチーム」を発足

① 合成医農薬 開発製造受託 に関する出来事	② バイオ医薬品 開発製造受託 に関する出来事
1985 製薬企業向けに抗菌剤用フッ素中間体の受託製造/供給開始	1984 医薬品開発にターゲットを絞った「バイオケミカルグループ」を設置
1997 若狭AGCファインケミカル（現AGC若狭化学）設立	2000 タンパク質受託製造事業に本格参入
2003 千葉工場内にGMP対応の治験薬製造設備完成	2008 千葉工場内に従来比10倍能力のバイオ受託新プラント建設
2008 緑内障治療薬原体「タフルプロスト」の製造販売承認取得	2016 ドイツのバイオ医薬品CDMOを買収（現AGC Biologics ハイデルベルグ拠点）
2013 AGC若狭化学が若狭テクノバレー内に上中工場を新設	2017 欧米に拠点を有するバイオ医薬品CDMOを買収（現AGC Biologics シアトル拠点、コペンハーゲン拠点）
2019 スペイン合成医薬品原薬製造工場を買収（現AGCファーマケミカルズ・ヨーロッパ）	2020 千葉工場に動物細胞設備を新設
2019 千葉工場のGMP対応の製造能力を10倍に増強	2020 米国のバイオ医薬品原薬工場を買収（現AGC Biologics ボルダール拠点）
2020 AGCファーマケミカルズ・ヨーロッパの設備増強を決定	2020 イタリアの遺伝子・細胞治療薬CDMOを買収（現AGC Biologics ミラノ拠点）
2021 AGC若狭化学の上中工場設備増強決定	2021 米国の遺伝子治療薬工場の買収（現AGC Biologics ロングモント拠点）
2022 AGCファーマケミカルズ・ヨーロッパの設備増強を決定	2023 mRNA CDMOサービス開始（AGCバイオロジクス Biologics ハイデルベルグ拠点）

次のページをお願いします。こちらが AGC グループのライフサイエンス事業の歩みになります。

いろいろ細かく書いてございますが、1973年にライフサイエンスチームを発足し、1980年から事業化、特にバイオにつきましては2000年には千葉工場、タンパク質の受託製造に本格参入し、2016年から主にM&Aを中心にバイオのCDMOの事業拡大を進めてきたという歴史になります。

バイオ医薬品CDMOの現状と見通し

- バイオベンチャー資金流入減の影響が継続。事業環境は回復傾向にあるも、回復のペースについては注視が必要。今後の状況を見極め必要な対策を進める
- 米国新規ラインは商用運転を再開し、24年から業績改善に寄与

	事業環境	新規ラインの立ち上げ
課題	コロナ特需による反動減、バイオベンチャーへの資金流入減などの影響	米国ボルダー工場における新規ラインの立ち上げ遅延
現状*	引き続きバイオベンチャーへの資金流入減の影響を受けるも、回復の兆し。更に、合理化など業績改善に向けた取り組みも実施。	抜本的な対策を実施し、23年末より商用運転に着手
今後の見通し	事業環境は回復傾向にあるも、回復ペースを注視し、状況を見極め追加の対策を検討・推進	24年以降徐々に業績改善

* 2024年6月4日現在

©AGC Inc. 8

それでは現状の状況につきまして、8ページでご説明申し上げます。先ほど少し触れましたが、特にバイオ医薬品のCDMOの状況について、こちらでご説明させていただきます。

バイオベンチャーと言われるAGCグループバイオCDMOの主な顧客に関しての資金流入減の影響が2023年から始まっていたのですが、まだある程度継続していると今は見ております。事業環境自体は、実際の前線では回復傾向にありますが、回復のペースについてはあまり楽観視しておりません。

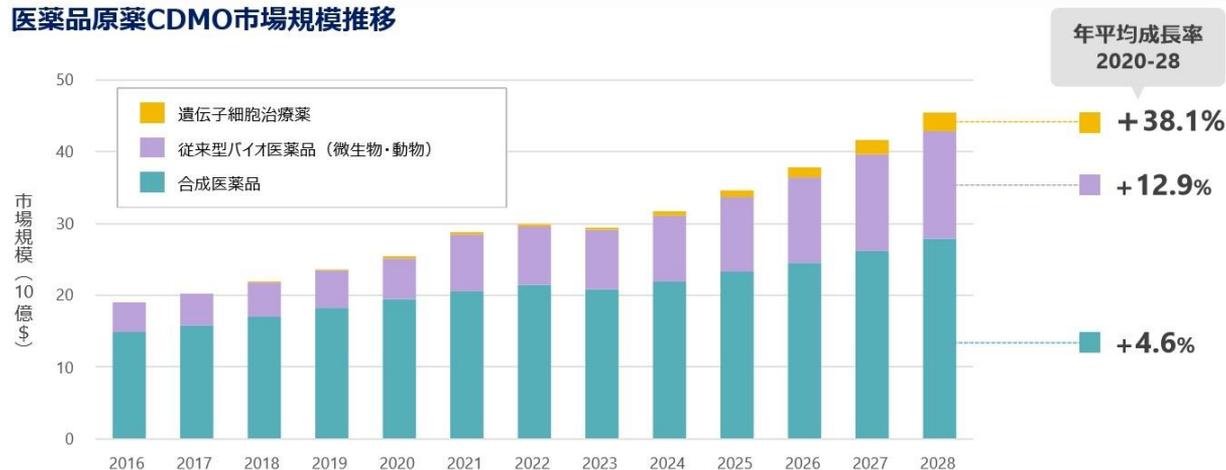
中長期的には需給バランスも含めて確実に回復してくると思っておりますが、本年の回復ペースについては、もう少し慎重に見る必要があるかなと考えております。その状況に応じていろんな施策を打っていくのが、われわれの考えているところでございます。

それから、昨年から業績にインパクトの大きかったバイオCDMO、米国の新規ライン、コロラド州の工場ですが、昨年はほとんど稼働をせずにかなり業績に影響があったのですが、このラインにつきましては本年から商用運転を再開しておりまして、本年それから来年に向けて業績改善に寄与してくると想定しております。

それらのことがこちらに書いておりますが、新規ラインの立ち上げにつきましては今お話ししたとおりで、これから来年に向けて大きく業績に貢献してくることを想定しております。

■ 外注増加の製薬業界の動きを受けて、AGCが取組むCDMO市場も着実に拡大

医薬品原薬CDMO市場規模推移



出典：EvaluatePharma, Globaldataなどを元に当社推計

©AGC Inc. 10

それでは、次のページ以降から業績および事業戦略についてご説明申し上げます。

まず事業環境です。10 ページ目が、われわれの産業である CDMO 医薬品の受託市場です。こちらの市場規模の想定になります。

一時的に 2023 年がバイオベンチャー等の資金流入の問題もございましたが、中長期的には製薬業界の動きといたしましては、生産のところを CDMO のいわゆる AGC のような企業に委託していくという形で、CDMO 事業が伸びていくのはほぼ確実だと見ております。

右のほうに年平均の成長率が書いてございますが、この CDMO 各社の投資、それから供給力拡大を見ても、少なくとも 2030 年ぐらいまでは需給バランスとしてはかなり需要が強いことが続くと考えております。特に一番下の合成薬品、低分子ですが、ここは安定成長、その上の紫とオレンジのバイオと言われるところが大きく伸びていく、このトレンドは変わらないと見ております。

ありたい姿とAGCの強み



ありたい姿

ライフサイエンス分野で
高度な専門性をベースにした
質の高いサービス・製品を提供し
世の中を豊かにする



強み

1. 日米欧 3 極・10 拠点で統合された高水準のサービス提供
2. 開発初期から商用までサービスを提供するフレキシブルな生産体制
3. 豊富な製造・査察実績

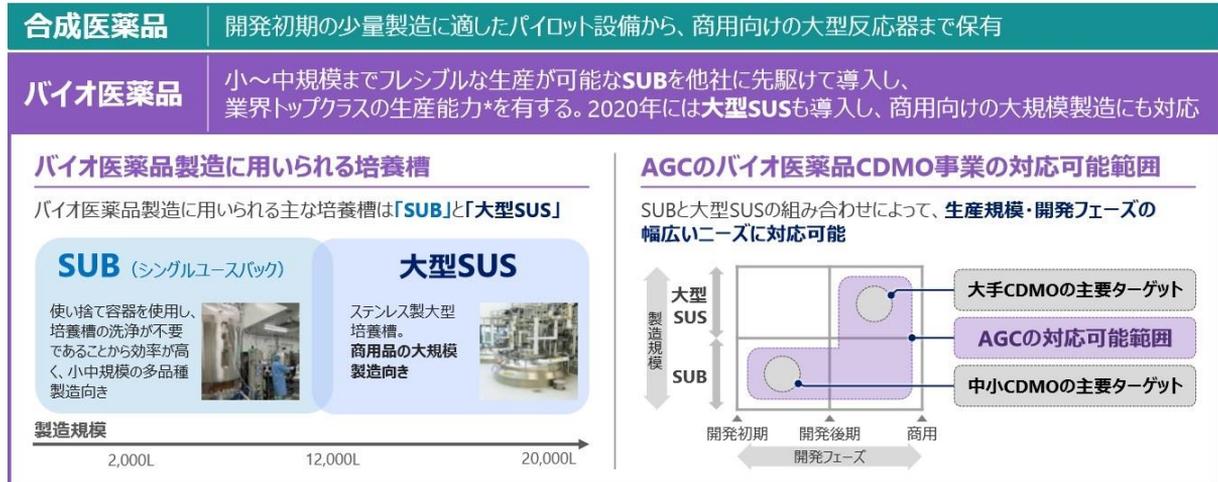
次のページが、AGC の強みになります。

われわれの強みといたしましては、まず現時点は日米欧 3 極・10 拠点でそれぞれ高水準の CDMO サービスを提供できることと、開発初期から商用まで対応できる。各グローバルのサイトが、それぞれ豊富な製造・査察実績、FDA、EMA と言われる査察の実績があることで、信頼される CDMO として強みがあると考えております。

中長期的には AGC グループは素材メーカーですから、さらにデジタルもしくはマテリアルズインフォマティクスといったような AGC グループの特徴を持った技術を適用することで、他社に差別化が中長期にはできると考えております。

強み | 開発初期から商用までのフレキシブルな生産体制

- 医薬品の開発フェーズの移行とともに変化する生産規模への多様なニーズに対応



* 当社推計

©AGC Inc.

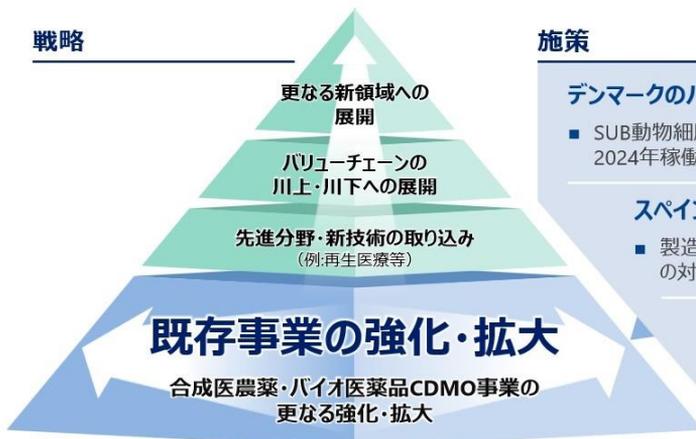
12

次の12ページ目が、今お話しした内容です。

合成医薬、それからバイオ医薬両方をやっていることと、開発初期の段階から商用までフレキシブルな生産体制を持っているのが一つの特徴になります。

- 基盤である合成医農薬・バイオ医薬品CDMO事業の更なる強化・拡大とともに、サービス・事業領域の拡大についても相応の時機を見極め検討

戦略



施策

デンマークのバイオ医薬品CDMO開発製造能力を増強

- SUB動物細胞培養槽*を追加し、同拠点の製造能力を倍以上に拡大。2024年稼働予定。

スペインの合成医薬品CDMOの開発製造能力を増強

- 製造能力を30%増強。近年需要が高まる高薬理活性原薬 (HPAPI) の対応設備も追加。2025年稼働予定。

国内のバイオ医薬品CDMOの開発製造能力を増強

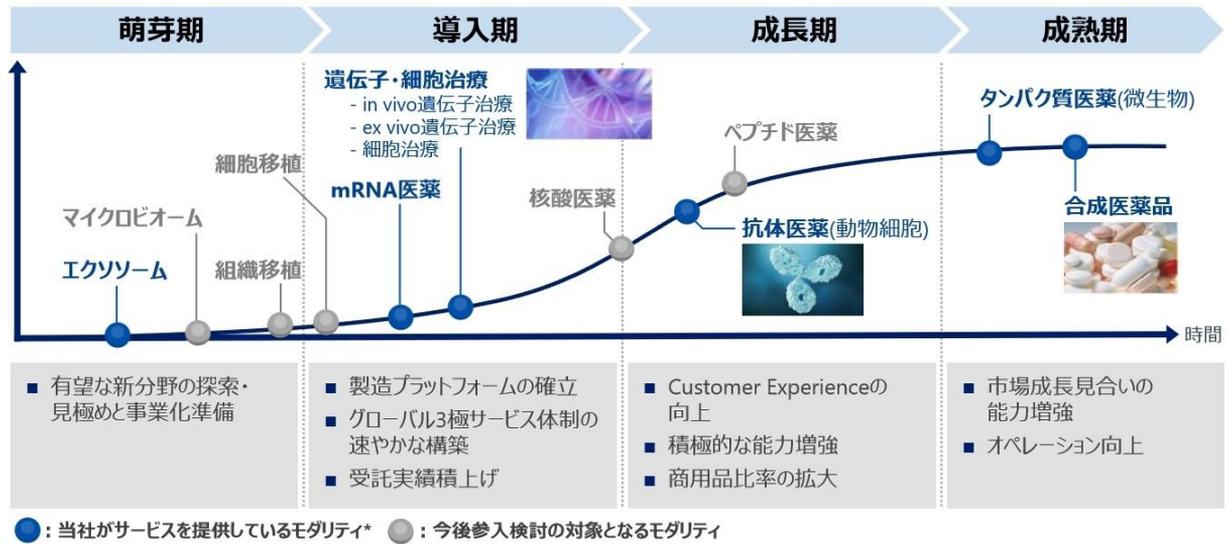
- 国内CDMOとして最大級の動物細胞培養槽に加え、最先端のmRNA医薬品や遺伝子・細胞治療薬の設備を導入。2025年から順次サービス開始予定。

*SUB動物細胞培養槽：シングルユースバックという使い捨て容器を使用した動物細胞培養槽

次をお願いします。短期、中期の戦略でございます。

基本的にはさらなる低分子、合成医農薬・バイオ医薬品の拡大、さらに技術面でもモダリティの拡大、こういったことを広げていこうと考えております。

各モダリティの市場成熟度に応じた事業戦略



参考 : Arthur D Little 2020年12月23日 医薬品開発協議会資料「医薬品関連の産業化に向けた課題及び課題解決に必要な取り組みに関する調査」

特にモダリティにつきましては、次のページになります。

われわれが手掛けている成熟期の合成医薬、それからタンパク質といったものから成長期の抗体薬、さらに将来の遺伝子細胞治療、mRNA、こういったところに積極的に投資をしております、これに応じた事業戦略をとっていくことを考えております。

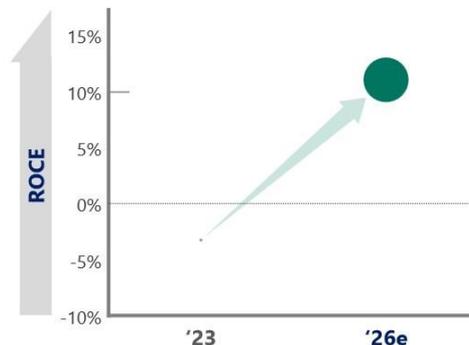
ライフサイエンスセグメントの業績目標

- 2026年には営業利益300億円、ROCEは10%超を目指す
- 現状は事業環境が極めて厳しいため、引き続き合理化などの収益改善策を検討・推進

業績推移イメージ (億円)



ROCE・EBITDA推移**イメージ



*2021年以前は化学品セグメント内のサブセグメント情報開示 (売上高のみ) 。2022年以降は独立セグメントベース (2022年は参考値) **円の直径: EBITDAの大きさ ©AGC Inc. 15

最後に、中長期の業績目標になります。

先ほどお話ししたとおり、2023年、一時的に市場環境の影響を受けまして売上と、また設備投資がここで入ったということで、営業利益が一度下がっておりますが、中長期的には市場も回復してこういった形で伸びていくと考えております。

2026年には、ここに書かれているような規模の業績目標を実現することを考えております。私からの説明は以上になります。

小川：村野さん、ありがとうございました。

[了]